

上野図書館の博士論文

—新元史の発掘—

従来、永田町の国立国会図書館本館で扱っていたわが国の博士論文の受入れ、整理、閲覧業務を、支部上野図書館で行うことになって、昭和57年7月から8月にかけて約19万5000人分の博士論文が上野に搬入され、9月から関係業務を開始した。当分の間、未整理分の整理排架、大学から新しく送付してくる論文の受入れなどで大忙しの毎日であったが、最近ようやく閲覧用カードを見る余裕がでてきた。一体、博士論文とはどんなものなのだろうかとカードを繰っていたある日、カードの中に「新元史」という標題を見つけた。

『新元史』といえば、民国8年(1919)柯劭忞が撰して中国の正史に加えられたものである。

中国では『史記』を始め『漢書』、『後漢書』など多くの史書が作られたが、清朝の乾隆年間、これら漢から明に至る国史のうち24を選んで正史とし、これを二十四史と称した。このうち元史は明初に作られたものであるが、作成の期間が短かったこともあり、また蒙古語資料の漢字標記の困難さもあって杜撰であると指摘されてきた。中華民国になって、柯劭忞が『元朝秘史』及び中央アジアとヨーロッパとの関係を研究し、西洋の学者の著作をも参考にして、十数年をかけて完成したのが『新元史』である。『新元史』が中華民国大總統令(民国8年12月5日公布 公報番号 1375)をもって正史と認められたので、中国の正史は二十四史から二十五史となった。併せて柯劭忞はこの『新元史』を日本の東京帝国大学に

提出して学位を請求し、大正12年12月10日(1923)文学博士の学位を授与された。この国際的また歴史的意義をもつ『新元史』257巻が現在上野図書館にある。現物は縦32.5 cm、横21.2 cmの大型線装本で全60冊。帝国図書館に移管後各冊の綴糸をほどこき、3冊ずつ合綴して新しく20冊にしてある。序文に天津の徐世昌が上梓した旨が書いてあり、また標題紙の裏に「退耕堂開雕」の印がある。所謂「天津徐氏退耕堂版本」と呼ばれるものであろう。上野の古い書庫の中でホコリをかぶってひっそりと書架に並ぶ『新元史』を見ると、忘れられた「歴史」の顔をかいまみる思いがする。

柯劭忞の学位授与に就いては、当時の学界でも評判となり、日中両国の学者がこれを紹介している。

植村清二「柯劭忞著『新元史』の審査報告に就いて」 史学雑誌 37(1) 1926

王桐齡評「柯劭忞新元史審査報告」 東方雜誌 21(12) 1924

王桐齡「介紹柯鳳孫先生新元史」 学衡 30 1924

(国会分館 泉水 蔵)